

マヌエル・デ・ファリャ

歌劇《はかなき人生》より●LA VIDA BREVE

交響的印象《スペインの庭の夜》●NOCHES EN LOS JARDINES
ピアノ独奏□木村香子DE ESPAÑA

恋は魔術師●EL AMOR BRUJO
独唱□春日成子(メゾソプラノ)

舞踊音楽《三角帽子》第2組曲●EL SOMBRERO DE TRES PICOS



指揮
芥川 也寸志

1988
4月3日(日)東京文化会館2:00p.m.

アマチュアオーケストラ
新交響楽団第119回演奏会

プログラム

Ⅰ 歌劇《はかなき人生》より LA VIDA BREVE

間奏曲　INTERLUDE



舞曲　DANSE



Ⅱ 交響的印象《スペインの庭の夜》NOCHES EN LOS JARDINES DE ESPAÑA

1．ヘネラリーフェで　EN EL GENERALIFE



2．はるかな踊り　DANZA LEJENA



3．コルドバの山の庭で　EN LOS JARDINES DE LA SIERRA DE CORDOBA



Ⅲ バレエ音楽《恋は魔術師》EL AMOR BRUJO

1．序奏と情景　INTRODUCCION Y ESCENA



2．洞窟の中―夜　EN LA CUEVA ― LA NOCHE



3．愛の悩みの歌　CANCIÓN DEL AMOR DOLIDO



4．幽霊　EL APARECIDO



5．恐怖の踊り　DANZA DEL TERROR



6．魔法の輪―漁師の物語　EL CIRCULO MÁGICO ― ROMANCE DEL PESCADOR



7．真夜中―占い師　A MEDIA NOCHE ― LOS SORTILEGIOS



8．火祭りの踊り　DANZA RITUAL DEL FUEGO



9．情景　ESCENA



10．鬼火の歌　CANCIÓN DEL FUEGO FATUO



11．パントマイム　PANTOMIMA



12．愛の戯れの踊り　DANZA DEL JUEGO DE AMOR

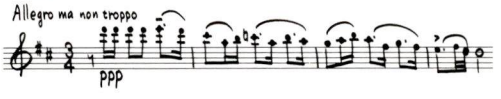


13．終曲―暁の鐘　FINAL ― LAS CAMPANAS DEL AMANECER



Ⅳ バレエ音楽《三角帽子》第二組曲 EL SOMBRERO DE TRES PICOS

1．近くの人達の踊り　LOS VECINOS



2．粉屋の踊り　DANZA DEL MOLINERO



3．終幕の踊り　DANZA FINAL



メッセージ

El Embajador de España

MENSAJE DEL EMBAJADOR DE ESPAÑA EN JAPON, CAMILO BARCIA

Es para mi una gran satisfacción que la Nueva Sinfónica que dirige el maestro Yasushi Akutagawa, haya elegido para su concierto de 1988 al compositor español Manuel de Falla. Las cuatro obras escogidas son, sin duda, las más representativas de éste célebre compositor español, que supo inspirarse en la música popular española y elevarla, gracias a su enorme talento y sensibilidad musicales, hasta un nivel internacional.

Durante mi estancia en Japón he podido notar el interés por la música española, como demuestra la presencia de grandes ejecutantes, cantantes y compositores españoles en éste pais. En el caso de Manuel de Falla, su música ha servido de inspiración para películas musicales españolas que se han estrenado con gran éxito en Japón.

Treintaiún años de experiencia avalan la calidad de la Nueva Sinfónica, profesional en cuanto a su calidad y maestría bajo la dirección del maestro Akutagawa, aunque haya sabido conservar el carácter amateur con que fue creada.

Como estoy seguro del éxito del concierto de la Nueva Sinfónica, solo me queda agradecer al maestro Akutagawa y a todos sus componentes, que hayan elegido como primer músico europeo para uno de sus conciertos al maestro gaditano Manuel de Falla.

Tokio, 29 de enero de 1988

C. h

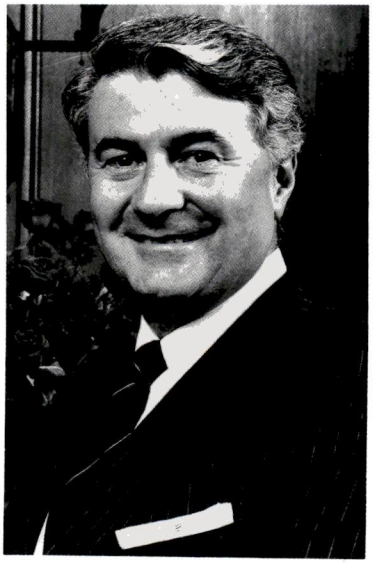
Camilo Barcia.

マエストロ芥川也寸志氏の指揮する新交響楽団の演奏会プログラムにスペインのマヌエル・デ・ファリャをとりあげられた事は、私にとってまことに満足すべき事です。ファリャは、スペインの民族音楽からインスピレーションを得、それを傑出した才能と感覚とによって、国際的なレヴェルまでに高める事に成功した希有の作曲家であり、ここに選ばれた４つの作品は疑いもなくこの高名な作曲家の最も代表作とされているものです。

日本に赴任して以来、私はこの国でとりわけスペイン音楽に対して大きな関心が示されている事を知りました。これは、日本にスペインの著名な演奏家、歌手、作曲家が招かれているという事からも推し測ることができます。ファリャの場合、日本で大成功を博したスペイン映画祭の幾つかの映画音楽としても登場しました。

新交響楽団は、31年の歴史に裏打ちされた卓越した演奏の質の高さをマエストロ芥川氏の指揮のもとで示し、同時にアマチュア精神を堅持しています。

演奏会の成功は疑いない事でしょう。私は芥川氏とオーケストラ各団員の方々に、４月の演奏会の演目にヨーロッパの中からまず巨匠マヌエル・デ・ファリャを選ばれた事に、感謝の意を表したいと思います。



在日スペイン大使
カミーロ・バルシア

マヌエル・デ・ファリャ

MANUEL DE FALLA



▲ 100ペセタ札にあるファリャの肖像

もしも音楽のなかに血液が流れているとしたら
これほど純粋な血液はないだろう。
マヌエル・デ・ファリャ！

独奏者紹介



ピアノ（スペインの庭の夜）

木村　香子

きむら・きょうこ

茨城県下館市生まれ。4歳よりピアノを始め、1976年上野学園附属音楽高校を卒業後、同大学に入学。1980年、上野学園大学卒業、東京音楽大学研究科に入学。同研究科在学中にオーディションによる定期演奏会に出演する。1986年には下館市にてリサイタルを開催。1987年、つくば・エキスポセンター・コズミックホールにて≪星空と音楽の夕べ≫に出演。同年、上海国際音楽コンクールで演奏奨励賞を受賞。故林悦子、酒井多可、志村安英の各氏に師事し、現在、東京音楽大学助手。



メゾソプラノ（恋は魔術師）

春日　成子

かすが・しげこ

桐朋学園大学卒業。伊藤花子に師事。1969年民音コンクール第3位入賞。1970年春ミュンヘン国立大学に留学。勉学の傍らミュンヘンでバッハのカンタータなどをカール・リヒターの指揮で歌い、1972年にはギーセン劇場の「蝶々夫人」に客演した。1973年バルセロナでの第19回マリア・カナルス国際声楽コンクールに第2位入賞。バルセロナで「ワルキューレ」に出演、イタリアのジュノヴァでは、「リゴレット」のマッダレーナを演じる。帰国後、新日フィルのマーラー「大地の歌」をはじめ、“第九”など数多くの演奏会で活躍している。二期会会員。

マヌエル・デ・ファリャ
——人と作品——

おきつ・けんさく
1925年兵庫県生まれ。1944年兵庫師範学校卒。
イスパニア語を独学。英知大学教授。
著書「合唱事典——イスパニア民謡」「ファリャ—生涯と作品」（音楽之友社）「中級イスパニア語文法」（創元社）他。

興津　憲作

黒い服に黒いネクタイを締め、身なりはいつもキッチリして、痩せて若い頃から頭が禿げている。何だか学校の小使いか教会の寺男といった感じ。ただその目に何か人を射るような光がある。言葉は少ないが、音楽の話になると、さり気ない言葉の中にも熱がこもる。謙虚で自己に厳しく、激情も無ければゼスチュアも無い一生を送ったファリャは音楽院の教授に名前だけ貸して欲しい、と言われた時、「名前だけ？でも働かずに月給を貰うなど、そんな怪しからんことは私にできません。お断りします。」と言った。子供の時に教えて貰った先生から音楽院のピアノ教授に至るまで、その恩を忘れず敬愛して止まなかったファリャのような人は西洋では珍しい。弟子のハルフターは「私はファリャを音楽の天才として尊敬するばかりでなく、その人間に大きな尊敬を抱いています。彼の一生は純粋で非の打ちどころがありません」と言っている。七十年に近い生涯を独身で通した彼は妹のマリア・デル・カルメンの世話になるのであるが、よく手を洗い、水は煮沸したのでないと飲まない、という神経質な面もあった。熱心なカトリック信者で修道者のような生活をする反面、月が人間に狂気をもたらす力を信じ、自分の人生は７年周期で何かが起ると思っていた。こんな彼のどこから激しい「恋は魔術師」のあのエネルギーが出て来るのか不思議であるが、あるいはこの小柄なおとなしい人間の中から、中に秘めた情熱がほとばしり出るところに彼のスペイン人たる所以があるのかも知れない。

ファリャの故郷はスペインの南端に近い、ジブラルタル海峡の大西洋側の入口にあるカディスという町で、1876年に生まれ1946年にアルゼンチンのコルドバ市で亡くなったから、明治の始めから日本敗戦の翌年まで生きたことになります。家は船舶代理店をしていた裕福な家庭で、妹と弟の三人兄弟、母親の家系が音楽好きだったので、ファリャこと、マヌエルは小さい時にこの母からピアノの手ほどきを受けた。おとなしい内向的な子で、子供の時にはこれと言ったような天才児の話は残っていない。が、音というものの醸し出す不思議な雰囲気に気を惹かれたらしく、本人の話では子供がおもちゃを壊わして中を見たがるように、音楽をバラバラに分析してみるのが好きだった、と言う。母親の次ぎにピアノと和声を先生について習うが、バッハの曲を真似て「ガボット」というピアノ曲を作り、それを音楽好きのビニエグラさんという人に賞められたことがあった。マヌエルの音楽的才能に気づいて本格的な勉強をするように奨めたのは彼のいつも世話になっていたフェドリアーニ神父である。その後、家が破産してマドリッドへ引きあげたので、彼は音楽院の七年課程をたった二年で卒業するという暴挙を敢えてした。一日も早く稼いで父の手助けがしたかったのである。既に作曲家を志していた彼はこの頃、スペインのオペレッタとも言うべきサルスエラを何曲か作曲するが、二十世紀の始め、イスパニア国民楽派の先駆者のペドレルに会い、民俗音楽の中にインスピレーションを求めよ、と教えられる。そしてこの頃、マドリッドの古本屋でルイ・ルーカス著「新音響学」という、彼のそれまで持っていた和声学の概念を根本的に変えてしまうような本に出会う。その後、彼はピアノコンクールに一等賞、オペラ作品コンクールに一等賞、と入賞するが、その入賞作品「はかなき人生」は上演されないまま三十歳を迎える。彼はついに意を決してその真価を問うべく1907年パリへ赴く。パリではアルバイトなどしつつデュカ、ドビュッシー、ラヴェル、アルベニスなどの友達に恵まれ、音楽家として認められていく。そしてパリへ来て六年目、その間、デュカの助言によって大幅に手を入れた彼の作品「はかなき人生」はついに上演され、大成功を見た。が、正にこれからという時に第一時大戦が起り、やむなく帰国する。持ち帰った「七つのイスパニア民謡」と「イスパニアの庭の夜」をマドリッドで初演。続いて「ヒタネリア」（ジプシー気質）を発表するが、これは失敗、後に改作して「恋は魔術師」となる。大戦が終ると、バレエ界の大立てものディアギレフと組んでロンドンでバレエ「三角帽子」に空前の大成功を収めるが、この年、父母を一年の間に亡くし、傷心の余り1920年、44歳の時、居をグラナダに移し、これより妹のマリア・デル・カルメンと暮らすことになる。グラナダでは当時既に有名だった青年詩人で劇作家のガルシア・ロルカを知り、共にカンテホンド・コンクールを主催し、アンダルシア民謡の振興に力を尽した。1923年に名作ドン・キホーテの一章をとって「ペドロ親方の人形芝居」という語り物の人形劇によるオペラを作曲上演、この時、セビリアで練習した臨時編成のオーケストラをもとに、翌年オルケスタ・ベティカという室内オーケストラを創設し、イスパニア中に新しい音楽の息吹きを伝える。

1919年に作曲したピアノ曲「ファンタシア・ベティカ」（アンダルシア幻想曲の意）は純粋ピアノ音楽を意図した作品で、このあとファリャの音楽は民族のルーツを求めて遠く過去へ溯る。その一つが「ペドロ親方の人形芝居」であり、1926年に作曲した「チェンバロ協奏曲」もそうである。こうした作品では彼は虚飾を去り、禁欲的となる。と同時に現代音楽に傾斜してゆく。後期に於けるこの系列の作品は一般の聴衆にとって難解であるためか、他の作品に比べて演奏される機会が少い。

グラナダに移り住んでからも演奏旅行などで忙しい毎日を送っていたが、晩年は健康がすぐれず、着手していた長篇叙事詩のカンタータ「アトランティダ」の作曲も進まぬままイスパニアは1936年より３年間、苦しい内戦期を迎える。内戦の終る年にアルゼンチンから、イスパニア文化センター創立25周年記念に演奏指揮を依頼されて彼の地に渡るが、二、三度演奏したあとは病重く、帰国の日を夢見ながら1946年、コルトバのアルタ・グラシアという所で亡くなった。未完成の情景つきカンタータ「アトランティダ」はその後20年以上たってから弟子のエルネスト・ハルフターによって完成を見た。

スペインの作曲家と言えば、アルベニス、グラナドス、ファリャの三人がまず心に浮かぶ。その次にくるのはトゥリーナというところでしょうか。しかしスペインの作曲家を一人だけ挙げよ、と言われれば、やはりファリャということになるでしょう。その理由は、作品は量的にそんなに多くはないけれども、ピアノ、オーケストラに留まらず、「七つのイスパニア民謡」のようなすぐれた声楽曲や、ドビュッシー追悼のギター作品、「チェンバロ協奏曲」、オペラ、人形芝居、バレエ音楽、舞台つきカンタータ、とバラエティーに富み、しかもその作品の一つ一つが異った内容をもち、質的にすぐれていることにあります。モーツァルト、ベー

MANUEL DE FALLA

トーベン、メンデルスゾーンといったような作曲家をとり上げてみると、その作品には、これはモーツァルトだなとすぐわかるところ、ベートーベンらしいところ、メンデルスゾーンのよく用いる手法、といったような特徴がありますが、ファリャにはそういったものがありません。その作品一つ一つが違った顔をしています。ということは彼がいかに創作ということに徹底したか、ということをその作品が語っているのです。皆さん、これを機会に今日聴かれる以外のファリャの作品にもこれから親しんで下さい。なお国名についてはわが国ではスペインとイスパニアの二つの呼び方が行われていますが、前者は英語で後者は現在の正式の呼び方España エスパーニャの古い形 Hispania です。日本のことを「ジャパン」と言うより「日の本」と言う方が正しいように、ここでは曲名には、よりオリジナルなイスパニアを使わせて頂いたことをお断りしておきます。

はかなき人生　La Vida Breve

1904年マドリッドの王立美術学校が一幕物のオペラの作曲コンクールを行い、これにファリャが応募して翌年一等に入選した作品である。

暗き宿命(さだめ)もて
生まれし者こそ不運なれ
金槌に生まれずして
金床(とこ)となる者こそ不運なれ

雑誌でこの詩を見てファリャは作者のカルロス・フェルナンデス・ショウに、このジプシーの宿命の詩をテーマに脚本をを書いて貰うように頼んだ。そしてこの「はかなき人生」が出来上った。

親の無い娘サルーはグラダナの叔父の家で祖母と一緒に暮らしている。彼女には既に将来を誓った恋人があったが、その美男で金持ちのパコはやがて他の金持の娘カルメラと結婚することになる。捨てられたサルーは二人の結婚式の場に赴き、男の不実を詰る。「わたしは歌いに来たのじゃない。踊りに来たのでもない、この人に会いに来たの。わたしを殺して！」と狂乱のサルーはパコの方へ詰め寄ろうとして倒れる。人々の上に恐怖が奔る。「サルー！」と取りすがる祖母。「あ、死んだ！」と一同の溜め息が洩れる。怒った叔父のサルバオールは短刀をひき抜き、「この裏切り者めが！」とパコを突き刺す。人々は立ちすくんだまま、なすすべを知らない。オーケストラは決然として悲劇を締めくくる。

この作品はコンクールに一等当選はしたものの、上演されないまま何年も過ぎた。ファリャは己れの真価を問うべくパリに赴き、ここでデュカの助言を得てこの作品に何回も手を入れ、大幅に改作する。こうして出来たのが二幕物の「はかなき人生」である。

今回の演奏は第二幕の始め、婚礼の宴からスペイン舞曲までの部分である。花嫁の家の窓から中庭で進行している華やかな祝いの催しが手に取るように見える。歌手が立ってフラメンコ特有の小節(こぶし)をきかした祝いの歌を歌う。手拍子しきり。歌が終ると、すかさずイ短調のこのスペイン舞曲が始まる。流れるような第一主題が何回も繰返してめぐる（**楽譜１**）。そのうち手拍子が入り興奮してくる。その興奮が極に達する時、ビートをきかした第二主題（**楽譜２**）が靴のかかとを鳴らして打ちつけるタコネオと共に始まり、興奮の坩堝(るつぼ)と化す。手拍子(パルマダ)、カスタネットが響く。流れるような第一主題が戻ってくる。踊りは恍惚の終局に向かってだんだん速くなっていって曲を締めくくる。

楽譜１



楽譜２



これだけのアンダルシア的興奮を創造した作曲家はファリャを措(お)いて他にない。クライスラーはこれを「スペイン舞曲」としてヴァイオリン独奏用に編曲している。

イスパニアの庭の夜　Noches en los jardines de España

ピアノとオーケストラのための交響的印象

この作品はわが国では今までほとんど演奏されたことがなかったが、いよいよ新交響楽団によって演奏されることになりました。「ピアノとオーケストラのための交響的印象」という副題からも分かるように、これはドビュッシー、ラヴェルの系列に連なる印象派的な作品である。パリ滞在中に手がけ、第一次大戦で帰国する時、ファリャのカバンの中には八分通り出来上ったこの作品が入っていた。帰国後これを仕上げ、1916年マドリッドの王立劇場で初演される。

これはアンダルシアの情緒である。その心、香り、雰囲気である。五感と皮膚に感じるアンダルシアの夜をそのまま音楽に表現したものである。三つの部分、①「ヘネラリーフェにて」②「遠い踊り」③「コルドバの山の庭にて」から成っている。①の「ヘネラリーフェ」というのは、グラナダのアランブラの城の上手に見えているモーロ王の夏の離宮で、糸杉の木立を縫ってしばらく行くと、花を沢山植えた眺めのよいテラスに出る。一番奥にモーロ風の宮殿があって噴水と庭の組合わせがよく調和して美しい。②の「遠い踊り」というのは、このアランブラの丘の北側、ダッロの小川を越えて谷の向かい側がアルバイシン、更に右手奥がジプシーの穴ぐら住居で有名なサクロモンテの丘である。これは恐らく夜が更けて、このジプシー地区界隈から聞こえてくる遠い踊りのどよめきなのであろう。③はアンダルシア平原を流れるグワダルキビル川のほとりにある、サラセン文化の栄えた地コルドバのすぐ北にある山地で、この山中には庵があったり、四季それぞれに祭があったりする所である。こうした名園をバックに、その夜の情感の世界――夜気、物音、香り、といったものを音楽にしたものであるから、聴かれる皆さんは自由に、想像力を大きくふくらませて、アンダルシアの夜気にひたって頂きたい。どんな空想を描くことも自由です。

楽器編成はホルン４本という特徴がある他は、ピアノコンチェルトとなんら変りはないのであるが、この作品では特にピアニストの腕前の見せ所など意図していない。ここではピアノはオーケストラの一部であり、しかも重要な主役を演ずる、というのがこの作品のあり方である。すなわちファリャはピアノをオーケストラの中の楽器としてその個性を取り上げた点に於て新機軸を開いたのである。

“ヘネラリーフェにて”

そこはかとない弱い弦のトリル、ヴィオラとハープがささやく

ような呟(つぶや)きを始める（**楽譜３**）。フラメンコによくある、あの不安感、今から何かが起こりそうな気配がある。やがてピアノが物語りを始める。物語りは水晶のように透明で、水のしたたりのように静かに始まる。あたりの静寂。それもつかの間で、ピアノは物狂おしく、細かい十六分音符をはじけるように弾き出す。オーケストラと競合して高まりを見せ、やがてオーケストラは一斉に夜の歌を歌い出す(**楽譜４**)。楽譜を一つ一つ細かく調べてみると、この作品は変奏曲の一種であることがわかるのですが、そんなことはどうでもよろしい。底でうごめくチェロとコントラバスの低いトレモロの呟きがあるかと思えば、ハープのグリッサンドが響き、弦はか細いすすり泣きを聞かせて最後はホルンの平和な響のうちに終る。

楽譜３



楽譜４



“遠い響き”

暗闇の中で何者かの走り回る音がする。風に舞うようなヴィオラのトリル。足音に次いでファゴットの野性の呼ぶ声（**楽譜５**）。ピアノが細かい音符を伴って同じテーマを高く歌い出す。こうして目に見えぬバレエは展開する……。オーケストラが第二主題を導入する（**楽譜６**）。ピアノが同じテーマをスタッカートでアクセントをつけてぶちつける。ギターを爪弾くようなピアノ、オーボエが第二主題を短縮して奏し、ホルンが呻(うめ)き声でこれに追随する。ピアノの両手ユニゾンとオーケストラが交互してせき込みながら焦燥感をつのらせて行く、かと思うとテンポがゆるくなったり、最後はティンパニーとシンバルが何回も打ちつけ、足音の入り乱れるうちに場面は次の楽章に移る。この間に休みは無い。

楽譜５



楽譜６



“コルドバの山の庭にて”

玉をころがすようなピアノの金属音が音階を奏で始めた時は既にもうこの楽章に入っている。ホルン四本が吠え立てる(**楽譜７**)。ピアノのフラメンコの抑揚を弾くような音階カデンツ。ハープのグリッサンドにチェレスタのアルペジオが上がったり下がったりするあたりは酒神バッカスの饗宴である。今やそのらんちき騒ぎは酣(たけなわ)だ。やがてピアノは決然として両手オクターブのユニゾンで新局面を告げる（**楽譜８**）。これはファンダンゴグランデの風格をもっている。そのあと、やさしいソロンゴを歌い出す（**楽譜９**）。ソロンゴというアンダルシアの踊りは6/8拍子と3/4拍子とが交互に現われる複合拍子で、このお喋(しゃべ)りがしばらく続く。かくしてオーケストラのファンダンゴグランデとピアノのソロンゴが交錯する。そしてソロンゴは色を変えつつ繰返される。ティンパニーが静かに時を刻み、弦はやさしく朝の訪れる気配。

楽譜７



楽譜８



楽譜９



「スペインの音楽」を書いたギルバート・チェイスは「この作品の中にはウナムーノがイスパニア人の魂の奥底にひそんでいると言った“人生の悲劇的感情”が脈打っている」と述べているが、これは注目すべき言葉である。

恋は魔術師　El Amor Brujo

この作品は当時フラメンコ舞踊では第一人者といわれていたパストーラ・インペリオから、マルチネス・シェッラの詩、ファリャの音楽で何か歌と踊りの作品を作って欲しいと依頼され、ジプシーの習慣や伝説をもとにして作ったものである。始め“ヒタネリア”（ジプシー気質）という題で簡単な筋のものであったが、後にこの本格的バレエ「恋は魔術師」に改作した。原作の“ヒタネリア”はたった四ヵ月で作ったというくらい、インスピレーションに乗って書いた作品である。

バレエの筋は、夫に死なれた若い妻カンデラスに恋人が出来るが、死んだ夫はやきもち焼きで、二人の邪魔をして脅かすので、祭壇をしつらえ悪魔祓いをして、女友達のルシアに「愛の戯れ」の踊りを踊って貰い、死霊がルシアの踊りに参った隙に二人は接吻を交わし、自由を獲得する、という一幕バレエである。

幕のあく前に短い**“導入部”**があり、フルート、オーボエ、ピアノによって震えを帯び、野性的なアクセントを伴って狂おしく鳴り出す（**楽譜10**）。聴衆はこの第一主題によって魔術的な世界にいっぺんに惹き込まれてしまう。

楽譜10



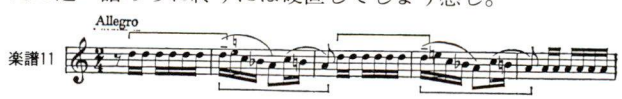
幕があがると、サクロモンテのジプシーの穴ぐら住居で、聖母を祀った祭壇にランプの焔がゆらめく。“恋の歎きの歌”が始まる。

一体どうしたのかしら　あの男がいないと
わたしのこの気持ち　燃えるローソクよ
わたしの血潮は地獄より激しく　嫉妬に燃えさかる
……

何かが起るような焦燥感。伴奏の打ちつけるような弦のラスゲアドと木管とピアノによるタコネオ、歌は怒りに震え、狂おしく揺れる。

“恐怖の踊り”　タラントゥラという毒ぐもに刺されると、死にもの狂いでこの踊りを踊って汗を流し、毒を出してしまえば助かると言われている奇妙な踊りである。この第一主題（**楽譜11**）のあと、上昇下降を繰り返す第二主題とが楽器を増しながら、だんだん追い詰められ終りには硬直してしまう感じ。

楽譜11



“魔法の祭壇”　甘くやさしく静かな「漁夫のロマンセ」と呼ばれる部分である。やがて夜中の12時を告げる鐘が「クラン・グロン・クラン・グロン」と6回鳴る。恋する女カンデラスは祭壇に近づき、火中に香を投じる。立ち昇る煙と共にヴィオラの低いトリルが始まる。やがて重い、暗いスタッカートのリズムに乗って踊りが始まる。

“火祭りの踊り”（楽譜12）

楽譜12



これは火の力を借りて神々を呼び、悪魔を追い払うための踊りである。前出の“恐怖の踊り”と共に有名で、色々な楽器の独奏曲としてもよく演奏される。だんだんとテンポを速めてゆき、踊り子は魔性（ドゥエンデ）に憑かれたように踊り狂い、ついにぐったりとくず折れる。

“情景”　オーケストラのピチカートの裏拍子を伴って歌う。

恋は鬼火と同じ　逃げても追ってくる
……

“パントマイム”　カンデラスの新しい恋人カルメロの踊りで、けだるく揺れる7/8拍子のグワヒーラのリズム。元の夫の幽霊は始めの第一主題で以て脅すが、もう力は弱っている。

“愛の戯れの踊り”　女友達のルシアがカンデラスの死んだ夫の幽霊を惹きつけようと必死に踊る（**楽譜13**）。踊りはマラゲーニャで、死霊は幻のように姿を現わして彼女と踊る。歌声は

わたしはお前の運命の声
お前を焼き尽す焔　お前の溺れる海よ
……

楽譜13



テンポはだんだん速くなり、幽霊はルシアに参ってしまう。その隙にカルメロとカンデラスは愛の接吻を交わす。二人の踊りは自由を獲得し、新しい愛が生まれたのである。

“フィナーレ”　朝の光がさす。二人に幸福が訪れ、鐘が鳴り出す。

夜は明けようとしている
歌え、鐘よ、歌え

闇から光の世界へ、オーケストラの流れは大きく変り、弦はフォルティッシモで歌う。

――幕――

「はかなき人生」と「恋は魔術師」は永久に残るアンダルシア音楽の最高峰である。外国人作曲家はもちろん、イスパニア人作曲家でもこれを超える作品はもう書けない。なぜなら、ファリャだけの才をもち、しかもこれだけのインスピレーションに乗って書いた作品は、も早や人間業の域を越えているからである。スペインに行ってフラメンコを探しても、これと同じふしはどこにも無い。この音楽はすべてファリャの創作である。

バレエ“三角帽子”　El Sombrero de tres picos

この原作は1874年にペドロ・A・デ・アラルコンの作った「三角帽子」という民謡風の小説で、それは岩波文庫から高橋正武氏の訳が出ているので、原典を読むことができる。三角帽子というのはこの冊子の次頁にその絵が載っているが、広いツバのついた帽子をツバを三方から上の方へ折り曲げたもので、昔、警察署長などがかぶっていたので、ここでは代官の権力の象徴として題につけたのである。

あらすじを述べると、所はグラナダで、小麦を粉に挽く水車のある所、ムルシア出身の粉屋と、ナバッラ出身の美人の女房が仲よく暮らしている。今日は6月24日、聖フワンの日、太陽の勢いがその頂点に達する夏至に近い頃だから、この日に何かが起ると古代人の考えた日である。

〔第一幕〕

水車小屋の前を代官様の行列が通る。代官様はここの美人女房を見てからむらむらっと恋の焔が燃え上る。あとで魂胆があって戻って来るのだが、女房はその魂胆を知っていながら知らぬふりして“女房の踊り”を踊っている。ふと代官に気がついて踊りをやめて深く頭を下げる。代官は疲れた様子で苦しそうなので、女房はぶどうの葉であおぐ。そしてぶどうの房を両手にして代官に近づくと、代官はそれを口にくわえようと、同時にあわよくばキスせんものと近づく。女房は後ずさりし、代官は追いかける。が、彼女はするりと身をかわす。代官はつまづいて転び、粉屋夫婦は代官を起こして機嫌をとる。二人の筋書きに気づいた代官は激怒し、「覚えておれ！」とばかりに座を蹴って退場。夫婦はそんなことには頓着せず、さっきの女房の踊りの続きを踊る。

〔第二幕〕本演奏会で演奏する部分である。

“村人の踊り”（セギディッリャ）

同じ聖フワンの日、かぐわしい星降るアンダルシアの夜である。村人たちは水車小屋の空地に集まり、楽しく“セギディッリャ”を踊る（**楽譜14**）。やさしいヴァイオリンに始まり、色を変えつつ何回も繰り返し、だんだん楽器を増してゆく。星屑のようにチェレスタの音が混じる。

楽譜14



“粉屋の踊り”（ファルッカ）

女房は夫にファルッカを踊りなさいと奨める。村人たちは輪になり、“粉屋の踊り”が始まる。まずホルンが野性の呼び声みたいな予告を奏し、弦のラスゲアドが始まる。フラメンコギターの奏法に右手を親指を外側にして握り、人さし指から小指の方へバラバラと開いていって四本の指の爪を弦にぶっつけて弾く奏法がある。これがラスゲアドで、ここではオーケストラでそのギターの音を出す。ジャカジャカ、ジャン、ジャン、と始まるこのファルッカはフラメンコの踊りの一つだが、四拍子のゆったりしたリズムで始まり、だんだん速くなり、突如、また始めのゆったりしたテンポに戻り、またアッチェランドして速くなる。これを繰り返すのであるが、踊り手は上半身を微動だにさせず、靴のかかとでタコネオのリズムを踏む。村人は「オーレ！」と掛け声をかけ、手拍子を打つ（**楽譜15**）。続いてオーボエが第二テーマを歌うよ

楽譜15



うに奏し、ホルンがこれを繰り返す（**楽譜16**）。やがて踊りは機関車の驀進する如くテンポがだんだん速くなり（**楽譜17**）、踊り手は魔性ドゥエンデに憑かれたように踊りまくる。テンポがその極に達した時、踊りはハタと止む。

楽譜16



楽譜17



踊りが終ると、みんなが笑い、飲み食いして騒いでいる最中にトントンとドアを叩く者がある。皆びっくりする。粉屋がドアをあけると、黒装束の警吏が二人立っている。「俺を逮捕する？何故？」と粉屋は抗議するが聴き入れられず引き立てられてゆく。村人は一人去り、二人去りして最後に女房だけが独り取り残される。こわくて鉄砲を持って寝室へ入り、灯りを消す。

静まり返った水車小屋。そこへ鼻にかかったファゴットの音がして代官がやってくる。が、彼は橋を渡る時、月が雲間に隠れ、つまづいて川に落ちる。物音を聞きつけて女房が鉄砲を持って出て来る。代官はこわくなる。女房もこわくなって自分の部屋へ引き返す。ずぶ濡れの代官は服と帽子を脱ぎ、椅子に掛けて粉屋の夫の寝室へ入ってしまう。この時、粉屋が代官所を抜け出してやってくるが、ここで代官の服を見てギョッとなる。「さては裏切られたか」と思うと無性に腹が立ち、そこにあった鉄砲を取り上げ、殺そうか殺すまいか思案する。「その時、三角帽子が椅子から落ちる。「お、そうだ！」彼の脳裡に素晴らしい考えが悪魔のようにひらめく。彼は炭のかけらを取り、白壁に「代官様、私は復讐に参ります。代官夫人も劣らず美人でござります」と大書すると、代官所へと取って返す。

そのあと代官がシャツのまま姿を現わし、自分の服を探すが見当たらない。粉屋の書いたものを読むと、「これは大変だ！」と逆上、粉屋の服を着たまま、額に手を当てて歩き廻る。

“フィナーレ”（シンフォニック・ホタ）

警吏が逃亡した粉屋を追ってやってくる。が、折も折、そこへ代官が粉屋の服を着て登場。警吏たちは粉屋だと思って跳びかかり、首を締めにかかる。粉屋の女房は夫を探して戻ってくる。ここでホタが始まる。ホタは彼女の出身地ナバッラのシンボルだ。が、そこで見たものは粉屋の服を着た代官が警吏二人と組んずほぐれつ争っているところだ。彼女は代官をてっきり粉屋だと思い、警吏をひっぱたく。音楽はだんだん速くなる。騒ぎを聞きつけて村人が三、四人駈けつける。ドンツク、ツクツクと法華のうちわ太鼓のリズムで群集はますます人数を増してくる（**楽譜18**）。おまけに代官の服を着た粉屋がここへ姿を現せたから話は余計ややこしくなる。代官の服を着た彼は群集のなぶり者になり、それでも粉屋の服を着た代官を女房が庇うのを見ると、腹を立ててライヴァルに突進する。折しも聖フワンの宵とあって、通りかかった人が大勢仲間入りしたから堪らない。大騒ぎとなる。その間に色爺が誰か分かる。粉屋と女房はついに和解する。今やオーケストラはシンフォニック・ホタを高らかに歌う（**楽譜19**）。群集はとうとう代官をつかまえ、ゴヤの絵で人形を毛布揚げしているように代官を毛布揚げする。再びホタ。もう完全に女房の勝利である。バレエは終局に向かってアッチェランド、大團円を締めくくる。

楽譜18



楽譜19

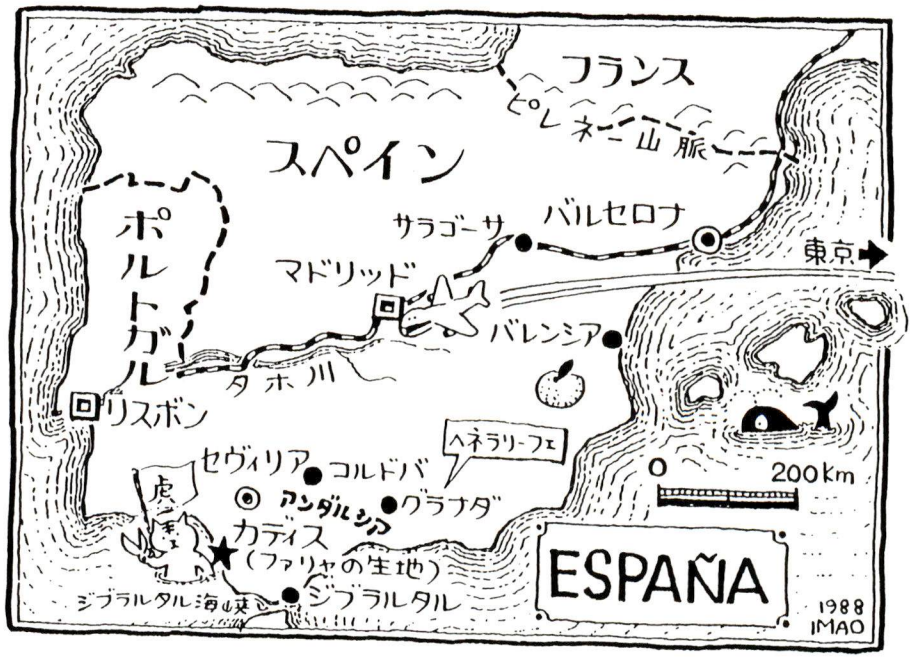


――幕――

ファリャの作品中、一番国民楽派的で、しかもポピュラーな作品であるこの三角帽子は第一次大戦の終った1919年にロンドンのアランブラ劇場で初演された。この時はピカソの衣裳並びに舞台装飾、エルネスト・アンセルメの音楽指揮、しかもディアギレフバレエ團という組合わせで、この公演は空前の大成功を収めた。



三角帽子
SOMBRERO
DE TRES PICOS



スペインの音楽と
マヌエル・デ・ファリャ

MANUEL DE FALLA

浜田　滋郎

はまだ・じろう
1935年東京生まれ。スペイン及びラテンアメリカの文学、音楽を研究。
著訳書「エル・フォルクローレ(晶文社)」「インディオの道/ユパンキ著(晶文社)」「スペイン音楽/スビラ著(クセジュ文庫)」「スペイン音楽の楽しみ(音楽の之社)」

スペインは豊かな音楽の国である。というと、小首をかしげられる方々もあろう。今日、演奏会場でスペイン人の作品が演奏される機会は、ドイツ、フランス、イタリア、チェコ、ロシア等の音楽と比べるまでもなく、多いとは決して言えないからである。しかし、視点を変えて、根強いファンが少なくないギターの音楽では、人気のあるレパートリーの大半をスペインの曲が占めていると言っても過言ではない。また、あのフラメンコに代表される民族音楽ともなると、スペインは、西ヨーロッパでは飛びぬけた多彩さと質の高さを誇ることができる。フラメンコはスペインの中でも南部アンダルシアの産物だが、その他の地方にも各々すぐれた民族音楽の伝統があり、味わいに富んだ美しさは、いったん付合い始めたらもう止められなくなる程である。地中海文明の西のはずれに位置し、狭い海峡を隔てて北アフリカと隣り合うスペインは、古代の昔から東西にわたる様々な人種の血と文化を受け入れ、蓄積させてきた。そこから、「西ヨーロッパの中で最もヨーロッパ的でない国」と呼ばれるこの国の独特な文化風俗が生まれ育ち、音楽の面にもそれが著しく反映しているのだ。かつてルネッサンスの時代に、スペインが世界に覇を唱えたことがあったのも、ここで思い起こさねばならない。その前後、中世からバロック期にかけてのスペインの古音楽は、往時の豊かな国力と文化の興隆を背景として形づくられた一つの宝庫である。たとえばアントニオ・デ・カベソン(1510～66)のオルガン音楽、トマス・ルイス・デ・ビクトリア(1548？～1611)の宗教合唱曲などに、一度は是非耳を傾けてみて頂きたい。崇高であると同時に情感の美を忘れない、得難い音の綾がそこに織りなされているのだから。

このように豊かで輝しい民族の文化と過去の伝統遺産を持ちながら、18～19世紀、古典派からロマン派の流れにかけて、＜大＞の字がつく程の作曲家を持てなかったのはスペイン音楽の不幸であった。その理由はいろいろに考えられるが、結局は17世紀以降の国力の衰えが悪く作用してスペインには新しい音楽文化の担い手となるべき中産階級の市民層があまり育たなかったこと、そして19世紀にはナポレオン戦争や相次ぐ内乱が人々を落ち着かせなかったことが原因に挙げられよう。

スペインにも独自の伝統に根ざした近代的な民族主義楽派を打ち立てたいと念じ、努力を重ねた重要人物、フェリーペ・ペドレル(1841～1922)がいた。その作品が人々から愛されるには至らなかったが、ペドレルは多くの弟子達を育てることによって、彼の理想を現実に持っていったと言える。中でも顕著なのはイサーク・アルベニス(1860～1909)、エンリケ・グラナドス(1867～1916)、そしてマヌエル・デ・ファリャ(1876～1946)で、これらスペイン民族主義三大家はいずれも若い頃、先達ペドレルからの励ましと影響を受けている。アルベニス、グラナドス、ファリャ……いずれもピアノの名手を兼ねていた三人の作曲家は、各々の流儀で、自分の作品に“お国ぶり”を生かしていた。ファリャは両先輩から一歩遅れて作曲活動に入ったが、管弦楽の扱いに他の二人の持たなかった格別の冴えを示し、世界中のコンサート・ホールに今日も高鳴っているような、卓越したオーケストラ曲をスペインの土地から初めて生み出したのである。南スペインの港カディスに生を享けたファリャは、しばらく首都マドリードでピアノと作曲を学び初期の主要作である歌劇≪はかない人生≫を完成した。この後、31歳の時から7年間をパリに過ごして、ドビュッシー、デュカス、ラヴェルなどとの交友を通じ精緻かつ漸新な近代フランス音楽の技法を学びとった。そうした知識及び感受性の練磨を、彼が持って生まれたスペインの血、故国への深い愛着が一つに結びついたところに、彼一流のすぐれた楽曲――バレエ音楽≪三角帽子≫≪恋は魔術師≫、交響的印象≪スペインの庭の夜≫、歌曲集≪七つのスペインの民謡≫、ピアノ曲≪四つのスペイン風小品≫≪アンダルシアの幻想曲≫……――が次々と生み出されたのである。こうしてファリャは、1920年までに「存分にスペイン的な特徴を持つと同時に世界的な視野に立ち広く迎えられる為の条件を備えた楽曲の創造」という、先人達の夢みた理想を実現しおおせた。勿論アルベニス、グラナドスもピアノ曲の世界ではそれを現実のものにしたと言える。しかしファリャは、何といっても近代音楽の表看板であるオーケストラ曲の世界で、それを成し遂げたのである。スペイン近代民族主義楽派の最高峰と彼が賞揚されたことは当然であった。

しかし、ファリャという音楽家の偉さは、そうしてかち得た代表者の座に安住してはいなかったところにもある。1920年代、古都グラナダの郊外に、落ちついた作曲生活を求めるようになってからのファリャは、それまでの後期ロマン派ないし印象派風な民族主義から方向を転じ、ストラビンスキーあるいはバルトークの時代にふさわしい、真に20世紀的な語法を探求したのである。その成果が、小さく見えながらじつは巨大なものを内に秘めた≪ハープシコード協奏曲≫や風変わりな歌曲≪ペドロ親方の人形芝居≫であった。スペインの内戦(1936～39)の後、ファリャは半ば精神的な亡命のようにしてフランコ政権下の故国を離れ、南米アルゼンチンへ赴いて、そのまま数年後に70年の生涯を閉じた。一生独身を通したファリャは、中期までの名作に聴く明るさ、華かさとは裏腹に、詩人肌の瞑想的な人柄を持っていた。ファリャという芸術家の深みは華麗な音符のかげに隠された神秘感と哀愁を聴きとどけることによって、初めて理解されるのである。

ファリャとフラメンコ

逢坂　剛

1922年の６月中旬、スペインの古都グラナダである音楽祭が開催された。フラメンコ史上に一つのエポックを画した、≪カンテ・ホンドのコンクール≫がそれである。

カンテ・ホンド（深い歌）とは、スペイン南部アンダルシア地方の伝統的な古謡を意味する。フラメンコの中でも、もっとも格調の高い歌として尊重される。人によっては、カンテ・ホンドとフラメンコは厳密に区別されるべきだ、と主張する者もいる。

フラメンコは19世紀以降、アンダルシアのジプシーを中心に発展した民族音楽である。古いものがすたれ、新しいものに人気を奪われるのは世のならいだが、フラメンコの世界でも同じことがいえる。グラナダでコンクールが開催された当時は、俗受けのする軽い歌謡曲ふうのフラメンコがもてはやされ、本格的なカンテ・ホンドは衰退の一途をたどっていた。このままではフラメンコがほろんでしまう、と危機感を抱く識者も少なくなかった。

マヌエル・デ・ファリャは、コンクールの２年ほど前からグラナダに移り住んでいた。もともとフラメンコに関心のあったファリャは、知人からコンクール開催の相談を受けると、即座に賛成して発起人の一人になった。

このときファリャとともに、当時のスペインを代表する多くの文化人が、発起人として名を連ねた。イグナシオ・スロアガ（画家）、ホアキン・トゥリナ（作曲家）、オスカル・エスプラ（作曲家）、ホアン・ラモン・ヒメネス（詩人）、フェデリコ・ガルシア・ロルカ（詩人）など、そうそうたる顔触れである。ファリャの影響力もあったと思うが、これだけの人びとを動かしたフラメンコというものは、やはりドゥエンデ（妖気）に満ちた魔界の音楽というべきだろう。

コンクールの本選は、アルハンブラ宮殿の中にあるアルヒベス広場で行なわれた。途中で雨が降り出したが、観客はほとんど帰らず、椅子を頭の上に乗せて歌を聞き続けた。

主催者側の方針で、出演者がアマチュアに限定されたため、内容的には必ずしもレベルの高いものではなかったようである。それでもグラン・プリを取ったディエゴ・ベルムデスの歌は、並みいるプロの審査員を唸らせた。ディエゴは別名〝エル・テナサス〟（やっとこ男）と呼ばれる70歳の老人で、コンクールに参加するためブニンテ・ヘニルという町から、３日間歩いてグラナダへやって来た。彼の歌を聞いたファリャは、「彼こそカンテの生き字引きだ」と感嘆したという。

またそのときディエゴ老とともに、マヌエル・オルテガという12歳の少年が入賞した。この少年はのちに〝マノロ・カラコール〟と呼ばれる、大物のカンタオール（歌い手）に成長した。マドリードで長い間≪ロス・カナステロス≫というタブラオ（フラメンコの酒場）を経営していたが、だいぶ前に交通事故で亡くなった。

審査員やゲストの中には、当時最高の歌い手といわれたマヌエル・トーレやニーニャ・デ・ロス・ペイネス、あるいはギタリストのラモン・モントヤなどがいた。クラシックの大ギタリスト、アンドレス・セゴビアも列席していて、コンクールの最終日に座興でフラメンコの≪ソレア≫を弾いたと伝えられる。

ファリャはグラナダに長く住んだが、生まれたのはアフリカに近い港町カディスである。カディスはまた、わたしの敬愛する偉大なカンタオール、アウレリオ・セジェが生まれ育ち、そして死んだ町でもある。アウレリオはファリャと親交があり、グラナダの別荘によく招かれたという。

1946年11月、アルゼンチンで死んだあと、ファリャの遺体は船で故郷のカディスへ運ばれた。そして法王庁の許可を得て、カテドラル（大聖堂）に葬られた。

今でもわたしはカディスへ行くと、アウレリオの生まれた家とファリャが眠るカテドラルに、かならず足を向けるのである。



アルハンブラ宮殿のヘネラリーフェ

MANUEL DE FALLA

スペインへの誘い

吉田　勉（新交響楽団元団員・在ニューヨーク）

スペインの印象はこの国のもつ歴史と伝統の厚み、その上につちかわれた国民性の魅力を感じさせる首都マドリッドからさらに南の地アンダルシアを訪れて一層鮮明なものとなる。音楽ファンとしてはやはり「カルメン」の舞台セビリアと「アルハンブラの想い出」のグラナダを是非とも訪ねてみたい。

街としての魅力ではセビリアである。街路樹のオレンジが南国の街らしいムードで迎えてくれる。まず街の中心にそびえるヒラルダの塔に登り、旧市街の趣きがそのまま残る石だたみのサンタクルス街を歩き、白壁とバルコニーの花に囲まれた小さな広場のカフェーで一休みするのも良い。

セビリアの夜で今一つ忘れてならないのはフラメンコである。できるだけショー化しているものは避ける。せめて観光客の団体がバスで乗りつけることのないタブラオへ出掛けたい。冒頭から激しく切れのいい手拍子とステップに圧倒され、フラメンコギターの饒舌さに舌を巻くが、そうしたテクニックもさることながら男女踊り手の間の情念のほとばしりが舞台を盛り上げていく様は見事である。目配りや指先の使い方一つ一つが雄弁であり、ステップを踏む時に軽くドレスをつまむ何気ない仕草にもセクシュアルな感情がこもる。ドン・ホセの心情もわかろうというものである。

さてこれに対しグラナダはアルハンブラに尽きる街である。あの甘美なギターの旋律がしみ込んでいる身には岩山の城塞というたたずまいが意外にすら思われるが、今一度アルハンブラはレコンキスタに抵抗したイスラム勢最後の砦であるという史実を再認識して先に進む。

奥まった宮殿に入っての圧巻がライオンのパティオ（中庭）である。静寂の中に500年前の音楽が閉じ込められているかの如くである。アラベスク紋様の波は絶えざるギターのアルペジオであり、庭を取り巻く回廊の柱と屋根のメロディックな連なりが見事である。加えて瓦の落ち着いた茶、柱の象牙色、背景の杉の緑、そしてあくまでも澄んだ青い空。目を庭に戻せば中央に12頭のライオンが支える噴水の水のしたたりが逆に庭の静けさを際立たせている。完全な空間の美がそこにある。回廊の椅子に腰かけて午後の日ざしが傾いていく様子をじっと見とれている時間は至福の時である。

見落としてならないのはここから歩いて７～８分の夏の離宮ヘネラリーフェである。一般の旅行ガイドには出ていないが、この離宮の中庭こそファリャが「スペインの庭の夜」の第一曲の曲想を得た庭である。たてに長さ50メートルほどの運河が走り、その間をアーチ状の噴水が続く。色鮮やかな花と緑がこぼれんばかりの生命力に満ちた庭である。望楼からグラナダの街が眼下に一望できる。シェラネバダから連なる背後の山々の岩肌の乾いた荒々しさとの対比を見るにつけ、この庭に心がなごむ。

スペインの魅力を言葉をもって伝えようとすることは結局のところ難しい。それは、スペインという土地、気候、風土の中で各人がそれぞれに感じとるべきものだからである。スペインに根ざした芸術、音楽もまた同様であるに違いない。日本人の感性で理解し、日本人の価値観で判断しようとしないこと、これがこのコンサートを楽しむコツである。リラックスして腰をかけ、リズムと色彩の乱舞を楽しむ。もし主催者側にスペイン風のレースをあしらうといったステージ衣装の一工夫、あるいはスペインワインのフリーサービスでもする、心と懐のおおらかさがあるならば、このコンサートは一層盛り上がること請合いである。

スペインのラッパ吹き達の思い出

今尾　恵介（新交響楽団・打楽器）

昨年６月に来日したスペイン国立管弦楽団を仕事で取材する機会があった。仕事というのは、宣伝になってしまうが、管楽器の雑誌「パイパーズ」というところに勤務している筆者が、毎月恒例の「来日オーケストラ管打楽器奏者使用楽器一覧」というページをつくるためのもので、要するに本番前のリハーサルの合間に舞台裏へ行き、管楽器奏者を片っ端からつかまえては、例えば「あなたはどこのフルートを使っていますか？」などと聞いてまわるのである。

とはいえ、何ヵ国語もできるわけではないから「海外旅行７ヵ国語会話」という小冊子をポケットに忍ばせて万一に備えている。この仕事、最初の頃は、話の通じない相手から何かを訊き出すなんてどれほど大変なことかと心配したものだが、実は「楽器」「マウスピース」「ありがとう」それから、あとは管の席次を知るために「１番２番…」という序数をその国の言葉で言えればほとんど大丈夫なのだ。

さて、かくして昨年６月、スペイン国立管の舞台裏へいつものように潜入した（もちろん主催者の許可をもらって）。さっそくラッパを持ったオッサンに「私、日本、管楽器、雑誌、いいか？　今おまえの楽器、何あるか、どこの工場か調べておる」という具合に、会話の本から探したスペイン語とカタコト英語を混ぜて訊いてみた。

するとラッパ氏、私がスペイン語を理解するかどうかは全く気にかけずにペラペラしゃべりまくる。それでもどうにかメーカー名などは聞くことができるのだ。「ふむ、バックね、マウスピースは？（ブーブーと唇を鳴らしてみせる）」すると「１Ｃ（ウノ・セー）」という具合に何となく判ってしまうから不思議だ。

ラッパ氏、ちょっとしゃべり足りなさそうな顔で「他に訊くことはないのか？」と声をかけてくれる。「そうか、次はトロンボーンだな？　おーい、ホセーっ！この人が今こんなことを調べているんだ」と、こちらが頼む前にどんどん呼んでくれる。いや、それよりだんだん人だかりになってきてしまった！

「おれのは訊かないのか？　おれはゴンサレス。楽器はブフェー（クランポン）だ。マウスピースはヴァンドレンの○番。おっ、オーボエがまだだね？　おーい、エンリケ～っ！」という具合。

「３番（テルセーロ）のあの人はマウスピースは何ですか？」と訊けば「あいつは１Ｃだ」「いや１½Ｃだ」と、口角泡を飛ばして議論になったりもする。こちらはスペイン語のウズ巻きの中でもみくちゃ。

ホルン奏者を見つけてくれた若いヴァイオリンの女の子（失礼（ペルドン））に「ムーチャス・グラシアス（どうもありがとう）」と言ったら、ニコッと笑って「ムーチャスというのは（大きく両手を広げて）こういうことよ。グラシアスはありがとうの意味。日本語ではムーチャスはどう言うの？」と訊いてくる。関西弁の「おーきに」にあたるんだろうけれど、関東弁ではピッタリくるのが見当らないので「『どーも』というのがムーチャスですよ」と少々不正確なことを教えてしまった。

それから次はサックスのおじさん。急に名刺を出したかと思うと「私はこういう者だが、ナントカというレーベルから私のレコードが出ている。日本で売りたいんだが、誰か紹介してくれまいか？」と売り込まれる始末。

とにかく、彼等みんなに共通していたのは、途中いろいろと通じにくい部分があっても最後にこちらが「ムーチャス・グラシアス」と言えば、例外なく満面に微笑みをたたえて「どういたしまして！　他に何かご用は？」と答えてくれたことだ。他の国のオーケストラでは、今まで知る限り、少なくとも人だかりを作ってくれるところはなかった。

こんなに陽気で世話好き、話好きな人たちのいるスペイン。ファリャの音楽というのはなるほど、こういう土壌から生まれてきたのだな、と大きく納得させられた昨年の６月の出来事だった。

マヌエル・デ・ファリャ
——作品と年譜——

上原　誠（新交響楽団・打楽器）

年号	主な居住地	ファリャとその周辺	作品					音楽史
			作曲年	作品名	ジャンル・編成	初演	出版	
								1874シェーンベルグ生まれる
1876	カ	11.23カディスに生まれる						1881バルトーク生まれる
								1882ストラヴィンスキー生まれる
1883	デ	ピアノを習い始める						1883ワグナー没
～84	ィ							1885ベルク生まれる
								1886リスト没
1890	ス	初めてマドリッドに行く トラーゴ教授にピアノを習う						
								1893チャイコフスキー没
1896		マドリッドに転居						
1897		マドリッド王立音楽院に入学	1897	メロディー Melodía	vc、pf			1897ドビュッシー「牧神の午後への前奏曲」
1898		スペイン 米西戦争に敗れる	1898	四重奏曲 Cuarteto (Andante y Scherzo)	vc、pf			1898 R. シュトラウス「英雄の生涯」
			1898	五重奏曲 Quinteto	vn、va、vc、fl、pf			
1899	マ	マドリッド王立音楽院卒業	1899 ～1900	前奏曲 Preludio	歌、pf			
			1900頃	気まぐれなワルツ Vals capricho	pf			
			1900頃	アンダルシアのセレナーデ Serenate andaluza	pf			
	ド		1900頃	夜想曲 Nocturno	pf			
			1900 ～02	トカメ・ローケの家 La casa de Tócame Roque	サルスエラ			
			1900 ～02	愛の施し Limosna de amor	サルスエラ			
	リ		1900 ～02	命令ラッパ El corneta de órdenes	サルスエラ			
			1900 ～02	マルタの十字架 La cruz de Malta （アマド・ビーベスとの合作）	サルスエラ			
	ッ		1901 ～04	君の黒い瞳 Tus ojillos negros	サルスエラ			
			1902	イネスの恋 Los amores de la Inés	サルスエラ	1902.4.12 テアトロ・コミコ		
	ド		1902	アレグロ・コンチェルト Allegro de concierto	pf			1903～05ドビュッシー「海」
			1904 ～05	**はかなき人生** La Vida breve 台本＝C. F. シャウ	オペラ(2幕4場)	1913.4.1ニース	1913 Eschig	
1905		「はかなき人生」音楽院オペラコンクール一等 音楽院ピアノコンクール一等						1905～09アルベニス「イベリア」
1907		パリへ行く						
			1908	4つのスペイン小曲 Cuatro piezas españolas 1. アラゴネーサ Aragonesa 2. クバーナ Cubana 3. モンタニェーサ Montañesa 4. アンダルーサ Andaluza	pf	1909.3.27パリ リカルド・ビーニェス独奏	1909 Durand	1908メシアン生まれる 1908～09マーラー「大地の歌」
	パ		1909	3つのメロディー Trois mélodies (仏) 1. 鳩 Les colombes 2. 中国風 Chinoiserie 3. セギディーリャ Séguidille 詞：T. ゴーティエ	歌、pf	1910.11パリ ミリエ夫人独唱 ファリャ伴奏	1910 Rouart –Lerolle	1909ディアギレフのロシア・バレエ団パリデビュー 1911マーラー没 1912シェーンベルク「月に憑かれたピエロ」 1912ドビュッシー「遊戯」
	リ							

年号	主な居住地	ファリャとその周辺	作品					音楽史
			作曲年	作品名	ジャンル・編成	初演	出版	
1913	パリ	「はかなき人生」ニースにて初演	1914～15	7つのスペイン民謡 Siete canciones populares españolas 1.ムーア人の衣装 El paño moruno 2.ムルシア地方のセギディーリャ Seguidilla murciana 3.アストゥリアス地方の歌 Asturiana 4.ホータ Jota 5.子守歌 Nana 6.歌 Canción 7.ポーロ Polo	歌、pf	1915.1.14マドリッド ルイサ・ベラ独唱 ファリャ伴奏	1922 Eschig	1913ストラヴィンスキー「春の祭典」初演
1914	マドリッド	世界大戦の勃発・帰国	1914	坊やを抱いた母親達の祈り Oración de las madres que tienen asus hijos en brazos 詞：マルチネス・シェッラ	歌、pf	1915.2.8マドリッド		1914～15 R.シュトラウス「影のない女」
			1915	オテロ（シェークスピア）の劇音楽 Otelo		1915バルセロナ		
			1915	ヒタネリア Gitaneria 台本：M.シェッラ	バレエ音楽 fl、ob、tp、hr、va、vc、cbs、pf	1915.4.15マドリッド		
			1915	**恋は魔術師** El amor brujo （ヒタネリアの改作） 台本：M.シェッラ	演奏会組曲 バレエ音楽	1916.3.28マドリッド 1925.5.22パリ B.ペレス・カサス指揮	1921 Chester	
			1911～15	**スペインの庭の夜** Noches en los jardines de España	pf、orch	1916.4.9マドリッド	1922 Eschig	
1916		ディアギレフ、マドリッドを訪れファリャと会う。	1916～17	代官と粉屋の女房 El corregidoryla molinera 原作：P.A.アラルコン 台本：M.シェッラ	パントマイム（室内orch）	1917.4.7マドリッド J.トゥリーナ指揮		1916～17プロコフィエフ「古典交響曲」
			1918～19	**三角帽子** El sombrero de tres picos （「代官と粉屋の女房」の改作）	バレエ音楽（orch）	1919.7.22ロンドン E.アンセルメ指揮	1921 Chester	1918ドビュッシー没 1918ストラヴィンスキー「兵士の物語」
1919		ディアギレフのロシアバレエ団により「三角帽子」ロンドン初演 振付：マシーン 美術：ピカソ	1919	鬼火 Fuego fatuo 台本：M.シェッラ	オペラ（orch） アントニオ・ロス・マルバ編曲による演奏会用組曲	1976ファリャ生誕100年 グラナダフェスティバル		
1919		父母の死	1919	ベディカ幻想曲（アンダルシア幻想曲） Fantasia Baetica	pf	1920.6.20ニューヨーク A.ルービンスティン	1922 Chester	
1920	グラナダ	グラナダに移り住む	1920	クロード・ドビュッシーの墓碑銘のための讃歌 Homeneje, pourle tombeau de Claude Debussy	ギター独奏	1921.1.24パリ マリ・ルイズ・カサデスス夫人	1920 Revue Musicale 誌	1917～21ベルク「ヴォツェック」
			1919～22	ペドロ親方の人形芝居 El retablo de maese pedro 台本：セルバンテスの「ドン・キホーテ」により作曲	人形芝居（orch）	1923.3.23セビリア ファリャ指揮（演奏） 1923.6.25パリ 同上　（芝居）	1924 Chester	1921シェーンベルク 12音技法による作曲を始める
			1924	プシケ Psique 詞：G.ジャン＝オーブリ	m-sop、fl、hp、vl、va、vc	1926.11.5バルセロナ	1927 Chester	

年号	主な居住地	ファリャとその周辺	作品					音楽史
			作曲年	作品名	ジャンル・編成	初演	出版	
			1923 ～26	チェンバロ協奏曲 Concierto para clavicémbalo 〔W. ランドフスカの委嘱〕	cemb(又はpf)、fl、ob、cl、vl、vc	1926.11.5バルセロナ W. ランドフスカ	1932 Eschig	
			1927	コルトバに寄せるソネット Soneto a Córdoba 詞：ルイス・デ・ゴンゴラ	歌(sop)、pf	1927.5.1パリ マデレーヌ・グレスレ	1932 Oxford Univ. Press	
1928		仏 レジオン・ドヌール勲章叙勲						1929ディアギレフ没
	グ							1930(昭5)新響(現N響) 定期に初めてファリャ作品(恋は魔術師)がとり上げられる。
1931		スペイン第二共和国						
			1933	マジョルカのバラード Balada de Mallorca 詞：J. ベルタゲール	無伴奏混声合唱	1933.5.21マジョルカ		
	ラ		1935	ポール・デュカスの墓碑銘 Le tombeau de Paul Dukas(仏)	ピアノ		1936 Revue Musicale 誌	1935デュカス没
			1920 ～38	讃歌集 Homenajes		1939.11.18ブエノスアイレス	1953 Ricordi	
	ナ		1933	1.アルボースの名によるファンファーレ Fanfare sobre el nombre de E. F. Arbós	4hr、2tp、perc			
				2.クロード・ドビュッシーにささげる á Claude Debussy (20ギター曲の管弦楽用編曲)	orch			
	ダ			3.ポール・デュカスにささげる á Paul Dukas (35ピアノ曲の管弦楽用編曲)	orch			
				4.ペドレリアーナ Pedrelliana	orch			
			1926 ～46 未完	アトランティダ Atrántida 詞：ベルダゲール アルフテルによる完成版 旧版(1960) 改訂Ⅰ版(1976) 改訂Ⅱ版(1977)	舞台用カンタータ 独唱、合唱、児童合唱、orch	1961.11.24バルセロナ 1962.6.28ミラノ・スカラ座 T. シッパース指揮 1976.9.9ルツェルン音楽祭 1977.5.20マドリッド	1962 Ricordi	
1936 ～39		スペイン内乱						
1939	アルゼンチン	第二次大戦始まる 招かれてアルゼンチンへ行く						
1946		11.14アルゼンチンのアルタ・グラシアにて死す						

*資料　興津憲作「ファリャ　生涯と作品」(音楽之友社)　　三省堂「クラシック音楽作品名辞典」

ファリャのレコード CD LP(無印)

●恋は魔術師

エルネスト・アンセルメ指揮　スイス・ロマンド管 …… ロンドン SLC8110
　カバレーン m-sop.
シャルル・デュトワ指揮　モントリオール響 …… ロンドン L28C1460
　トゥランジョー m-sop.　　⟨(CD)⟩ロンドン F35L50140
ジュリーニ指揮　フィルハーモニア管 …… ⟨(CD)⟩エンジェル CE28-5047
　ロス・アンヘレス sop.

●三角帽子(全曲)

エルネスト・アンセルメ指揮　スイス・ロマンド管 …… ロンドン SLC8089
　ベルガンサ m-sop.　　⟨(CD)⟩ロンドン L-3121-3
シャルル・デュトワ指揮モントリオール響 …… ロンドン L28C1460
　ボーキー sop.　　⟨(CD)⟩ロンドン F35L50140
アンドレ・プレヴィン指揮　ピッツバーグ響 …… フィリップス 30PC29
　シュターデ m-sop.　　⟨(CD)⟩フィリップス32CD21
ヘスス・ロペス＝コボス指揮　シンシナティ響　⟨(CD)⟩テラーク 32CD80149
ジュリーニ指揮　フィルハーモニア管 …… ⟨(CD)⟩エンジェル CE28-5047
バティス指揮　メキシコ州立管 …… ⟨(CD)⟩ビクター VDC1196

●スペインの庭の夜

バレンボイム指揮　パリ管　アルケリッチ pf ……⟨(CD)⟩エラート R32E1040
フリューベック・デ・ブルゴス指揮　ロンドン響 …… ロンドン L28C1762
　ラローチャ pf　　⟨(CD)⟩ロンドン F35L50252
バティス指揮　メキシコ州立管
　エヴァ・マリア・ズーク pf

●チェンバロ協奏曲

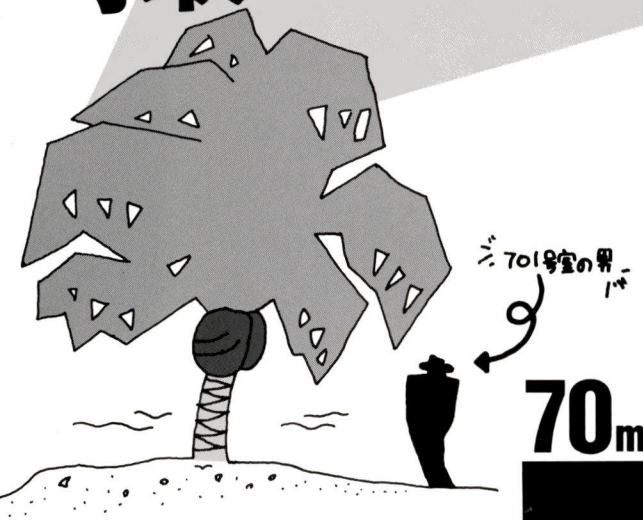
ブーレーズ指揮　ニューヨーク・フィル …… CBS・ソニー 25AC12
　キプニス cemb.

●アンダルシア幻想曲・4つのスペイン風小品 …… ロンドン L15C2209
　ラローチャ pf

RICOH

私たち、

35mm、70mm、105mmで撮られたんです。



35mm レンズ鏡筒が収まった状態ならワイド35mm。開放F値も2.8と明るく、通常のスナップや室内でのスナップに力を発揮します。



70mm レンズ鏡筒が繰り出した状態がテレ70mm。表情を狙いたい人物撮影や、小さな被写体の撮影に便利です。



105mm 70mmの状態に専用テレコンバーターを装着すると105mmのスーパーテレに。遠く離れた被写体などに。



私たち、
701号室のカメラで
撮られたん
デス。

専用テレコンバーター（別売り）を
装着した状態



701号室の、TF-500D

誰にでもやさしいフルオートフ2焦点カメラ



RICOH TF-500D 標準価格（本体）55,800円 ケース2,000円
専用テレコンバーター9,800円（ケース付）

株式会社リコー 光学事業部
〒104 東京都中央区銀座6-14-6 TEL.03(543)5111

好評発売中

日本の作品、演奏家にスポットを当てるフォンテックの話題盤をご紹介します。



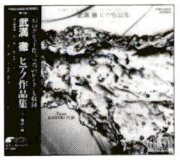
ケイコ・ブリランテ

清原敬子「ヴィニアフスキ／チャイコフスキー」を弾く

★「朝日試聴室」推薦

華麗なるポロネーズ イ長調
華麗なるポロネーズ ニ長調
モスクワの思い出
ステルツォ・タランテラ
レゲンデ
〈以上、ヴィニアフスキ〉
メロディ
ワルツ・スケルツォ
ゆううつなセレナーデ
〈以上、チャイコフスキー〉
ヴァイオリン——漆原啓子
ピアノ——林 裕子

FOCD3201 ¥3,200 (CD)
FONC-8027 ¥2,800 (LP)



武満 徹／ピアノ作品集

雨の樹素描
閉じた眼
フォー・アウェイ
ピアノ・ディスタンス
遠られない休息
3つのレント（世界初録音）
ピアノ——藤井 眸

FOCD3202 ¥3,200 (CD)

★「レコード芸術」「音楽の友」「ステレオ」推薦



こんなときに

三善 晃／作曲

組曲 こんなときに〈全5曲〉
こどものためのピアノ曲集「音の森」から〈5曲〉
こどものピアノ小品集「海の日記帳」から〈7曲〉
連弾ピアノのための組曲「カイエソノール」〈全5曲〉
2台のピアノのための組曲「唱歌の四季」〈全5曲〉

ピアノ——田中瑤子、三善 晃

EFCD3201 ¥3,200 (CD)
EFO-5007 ¥2,500 (LP)

田中瑤子・三善 晃
ピアノでスがくノルベン



青島広志合唱作品集

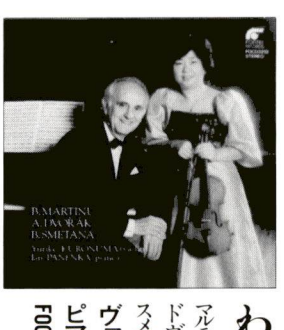
本家マザー・グースのうた

新しい「合唱」の世界をつくる、シアター版・ユーラスCD

谷川俊太郎・訳 青島広志・曲

演出——加藤 直
指揮——栗山文昭
ピアノ——青島広志、須永真美
声——山下千景（プリキの自発団）
合唱——千葉大学合唱団

EFCD3003 ¥3,000 (CD)
●新発売



黒沼ユリ子、ヤン・パネンカによる13年ぶりのデジタル新録音

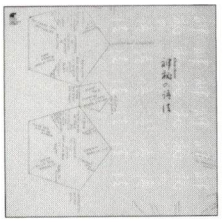
わが故郷 チェコ室内楽名曲選

マルティヌー／ヴァイオリン・ソナタ第3番
ドヴォルジャーク／ロマンス〈短調 作品11
スメタナ／二重奏曲「わが故郷より」

ヴァイオリン——黒沼ユリ子
ピアノ——ヤン・パネンカ

FOCD3213 ¥3,200 (CD)

●新発売



クラウス・フーバー

ポスト・ウェーベルン以後最大の作曲家
クラウス・フーバー日本初紹介

神秘の語法

夜にきらめく靈的な光 (1961)
からし種 (1975)
かくも相反するものを、一つにする結び目よ (1984)
及川真理子（チェンバロ）、坂口明子（ヴァイオリン）
竹内晴夫（ヴァイオラ）、荊田雅治（チェロ）
長谷川 真（ボーイソプラノ）
聖グレゴリオの家合唱団

FONC-5077 ¥2,500 (LP)

〈一九八六年十月五日／聖グレゴリオの家におけるライブ録音〉



細川俊夫作品集

現代作曲界にあって、いま最も注目を集めている細川俊夫の最新作

うつろひ——音宇宙I

うつろひ——笙とハープのための (1986)
恋歌——ソプラノとギターのための (1986)
線——独奏フルートのための (1984)

笙——宮田まゆみ ハープ——長澤真澄
ソプラノ——佐藤登和子 ギター——田部井辰雄
フルート——ピエール・イヴ・アルトー

FOCD3211 ¥3,200 (CD)



現代日本のクラリネット作品

〈浜中浩一の世界——1〉

三善 晃／彩夢 (1982)・
末吉保雄／コレスポンダンスII (1975/76)・
北爪道夫／シャドウズIV (1977)
湯浅譲二／クラリネット・ソリテュード (1980)
藤田正典／セレナーデ (1983)・

クラリネット——浜中浩一、二宮和子・
ピアノ——木村かをり・

★「レコード芸術」特選

FOCD3209 ¥3,200 (CD)



クラリネット五重奏曲

モーツァルト
フランセ

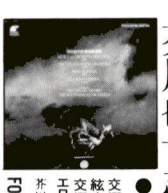
〈浜中浩一の世界——2〉

モーツァルト クラリネット五重奏曲 イ長調 K581
フランセ クラリネット五重奏曲

クラリネット——浜中浩一
ヴァイオリン——久保陽子、恵藤久美子
ヴィオラ——菅沼準二 チェロ——安田謙一郎

FOCD3210 ¥3,200 (CD)

★「音楽の友」特選
★「朝日試聴室」「レコード芸術」推薦



芥川也寸志管弦楽選集

●作曲者指揮による決定盤

交響管絃楽のための音楽 (1950)
絃楽のための三楽章 トリプティク (1953)
交響曲第一番 (1955)
エローラ交響曲 (1957/8)

芥川也寸志指揮 新交響楽団

FOCD3208 ¥3,200 (CD)

〈一九八六年十一月二十日／東京文化会館大ホールにおけるライブ録音〉

★昭和62年度第25回「レコードアカデミー賞」〈日本人作品部門〉受賞



スーパー・ヴィルトゥオーゾ

武藤賢一郎／超絶のサクソフォーン

パッツィーニ／妖精の踊り
フォーレ 夢のあとに
ラフマニノフ ヴォカリーズ
他 全13曲

サクソフォーン——武藤賢一郎
ピアノ——藤井 眸

FOCD3206 ¥3,200 (CD)

★「朝日新聞」推薦

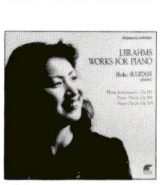


モーツァルト フルート四重奏曲

モーツァルト／フルート四重奏曲
第1番 ニ長調 K285 第2番 ト長調 K285a
第3番 ハ長調 KAnh171 (285b)
第4番 イ長調 K298

フルート——金 昌国 ヴァイオリン——漆原啓子
ヴィオラ——百武由紀 チェロ——山崎伸子

FOCD3207 ¥3,200 (CD)

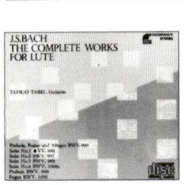


ブラームス ピアノ作品集

3つの間奏曲 Op.117
ピアノ小品集 Op.118
ピアノ小品集 Op.119

ピアノ——杉谷昭子

FOCD3212 ¥3,200 (CD)



J.S.バッハ リュートのための作品全集

プレリュード、フーガ
アレグロ BWV998
リュート組曲（全4曲）
プレリュード BWV999
フーガ BWV1000

ギター——田部井辰雄

FOCD3203 4 ¥6,400 (CD 2枚組)

FONTEC RECORDS

▶全国有名レコード店でお求め下さい。

発売元：株式会社フォンテック
〒167 東京都杉並区荻窪5 22 5
☎03-393-0183(代)

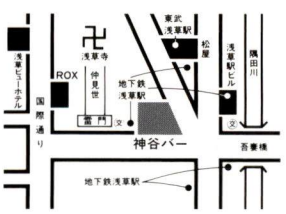


明治生まれの粋なカクテル
『デンキブラン』
甘い香りのハーモニーを、お聴きください。

創業明治13年——デンキブラン

神谷バー

1階神谷バー 2階レストラン 3階和風割烹 浅草1丁目1番1号
☎03(841)5400 ご宴会・ご商談にもご利用ください。〔火曜定休〕



BUNKYO 〒112東京都文京区小石川2-1-11☎03(811)2084
世界の名器を常時、多数在庫いたしております。



外観の美しさ、曲線の至上美、
完璧な音色——ピグマリウス。
Pygmalius



JASRAC
日本音楽著作権協会
理事長　芥川也寸志
〒105 東京都港区西新橋1-7-13
☎(03)502-6551

